

1 顔の良性腫瘍

千葉大学医学部附属病院皮膚科

丸 裕吾

MARU Yugo

千葉大学大学院医学研究院皮膚科学

外川八英

TOGAWA Yaei

1 はじめに

顔面は全身の皮膚のなかでも代表的な日光露出部であり、加齢や紫外線への曝露の影響によって、皮膚の構造の変化やさまざまな皮膚腫瘍が生じる。顔面に生じる皮膚悪性腫瘍で重要なものの1つとして、悪性黒色腫(メラノーマ)の初期病変である悪性黒子(lentigo maligna; LM)が挙げられる。LMは肉眼的には平坦で辺縁不整な黒褐色斑～青灰色斑を呈し、早期の適切な治療が望まれるが、他の日光露出部に好発する平坦な色素性病変、すなわち日光黒子や脂漏性角化症、扁平苔癬様角化症、あるいは色素性日光角化症との鑑別が困難であることが知られている¹⁾。ダーモスコピーは、おもに色素性の皮膚病変において肉眼的所見のみに基づく臨床診断の不正確さを補うために使用されてきたが、最近では非色素性病変の診断にも汎用されつつある²⁾。本稿でははじめに、顔面の皮膚の一般的な組織学的特徴と、それらの特徴に起因するとされる、顔面に特有のダーモスコピー所見の特徴について解説する。次に、顔面に生じる良性病変をメラノサイト系病変、LMとの鑑別が重要な色素性の非メラノサイト系病変、非色素性病変に分類し、それぞれ実際にわれわれが経験した症例の肉眼像とダーモスコピー像を用いて解説する。

2 顔面の皮膚の組織学的特徴とダーモスコピー所見の関連

顔面の皮膚の脂腺・毛包は顔面以外の生毛部の皮膚に比べて密度が高く³⁾、加齢や紫外線への曝露の影響により、組織学的には表皮突起が平坦化し、表皮は菲薄化す

ることが知られている。顔面以外の生毛部では表皮突起におけるメラニン沈着の増加により、ダーモスコピーにおける特徴的な網目状のpigment network(色素ネットワーク)が形成される⁴⁾。これに対し顔面では組織学的に表皮突起が平坦化しており、色素性病変におけるダーモスコピーで典型的なpigment networkは観察されず、豊富に存在する毛孔がびまん性の色素沈着に介在することによりpseudonetwork(偽ネットワーク)を呈する³⁾。なお、顔面以外の生毛部においてはpigment networkはメラノサイト系病変の特徴的な所見の1つだが、顔面におけるpseudonetworkはメラノサイト系病変に特異的ではなく、日光黒子や脂漏性角化症など色素性の非メラノサイト系病変においても認められることに留意する^{3,4)}。

3 メラノサイト系病変

顔面における良性のメラノサイト系病変、すなわち一般的な顔面の母斑細胞性母斑は、小児では肉眼的には平坦な色素斑あるいは丘疹を呈することが多く³⁾、ダーモスコピーでは前記のpseudonetworkや、形と大きさ、色調の均一な小球(globules)が病変全体に対称性に分布するglobular patternを呈することが多い⁵⁾。また成人において最も一般的なものは、Miescher型の真皮内母斑であるとされる³⁾。Miescher型の真皮内母斑は、臨床的には表面平滑でドーム状に隆起する低色素性あるいは無色素性の結節であり、結節の多くには硬毛を伴う。ダーモスコピーでは、血管所見としてはcomma vesselsが認められることが多く、常色～茶褐色の色素沈着を背景として、時に褐色のglobulesや毛孔を囲む褐